
[成果情報名] 促成栽培ナスでの天敵昆虫と防虫ネットを組み合わせた総合的害虫管理
[要約] 促成栽培ナスにおいて目合いの小さい防虫ネットを設置し、アザミウマ類にタイリクヒメハナカメムシ、コナジラミ類に対してオンシツツヤコバチを放飼する総合的害虫管理体系により、慣行防除に比べて殺虫剤の散布を顕著に削減できる。

[キーワード] 促成栽培ナス、総合的害虫管理、タイリクヒメハナカメムシ、オンシツツヤコバチ

[担当部署] 病害虫部・虫害チーム

[連絡先] 092-924-2938

[対象作物] 野菜

[専門項目] 病害虫

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

近年、消費者の安全で安心な農産物に対する要望が高まっており、できる限り農薬の使用量を削減することが求められている。このような状況の中、福岡県では平成14年に減農薬減化学肥料栽培認証制度を設け、農薬の使用量を現行の50%に削減することを推進している。そこで、本県の主要な農産物であるナスの促成栽培において、農薬に替わる防除資材である天敵昆虫類や防虫ネットを中核とした総合的害虫管理を確立し、減農薬栽培の普及を支援する。

[成果の内容・特徴]

- 1．促成栽培ナスにおいて、目合いの小さい防虫ネット（0.4mm×0.2mm）と天敵昆虫（アザミウマに対しタイリクヒメハナカメムシ、コナジラミ類に対しオンシツツヤコバチ）を組み合わせた総合防除は、慣行防除に比べて殺虫剤の散布回数を削減でき、特に3月までの削減効果は大きい（表1）。
- 2．タイリクヒメハナカメムシは、アザミウマ類（主としてミナミキイロアザミウマ）の密度が低い10月下旬と11月上旬に放飼する。放飼前にハウス内に糠や朮がらをまいて代替餌のコナダニの発生を促すことにより、タイリクヒメハナカメムシは葉（図1下）および花（データ略）に定着し、春季まで発生を繰り返す。
- 3．総合防除では慣行防除よりアザミウマの発生は多くなるが、選択的殺虫剤で補うことにより、果実に被害が発生しない密度に抑制する（図1上、被害果は試験区の6月下旬に6.7%発生したのみ）。
- 4．オンシツツヤコバチは、気門封鎖型を選択的殺虫剤でコナジラミ類（主としてタバココナジラミ・バイオタイプQ）の密度を低下させた後、10月下旬、11月上旬、1月中旬に放飼する。この組み合わせにより、コナジラミの密度を3月下旬まで低く抑制するが（第2図）、4月以降には、効果が低下する。

[成果の活用面・留意点]

- 1．現場での促成栽培ナスにおける防除資材として利用できる。
- 2．化学農薬を使用する場合には、タイリクヒメハナカメムシとオンシツツヤコバチに影響のないものを選択する。

[具体的データ]

表1 殺虫剤の散布回数（成分回数、但し、生物的防除資材を除く）

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	計
総合防除	3	4	0	1	0	0	1	4	7	8	28
慣行防除	6	10	4	2	2	3	2	2	2	4	37

注) 慣行防除は、主としてコナジラミの発生をもとに生産者の判断で殺虫剤を散布した。

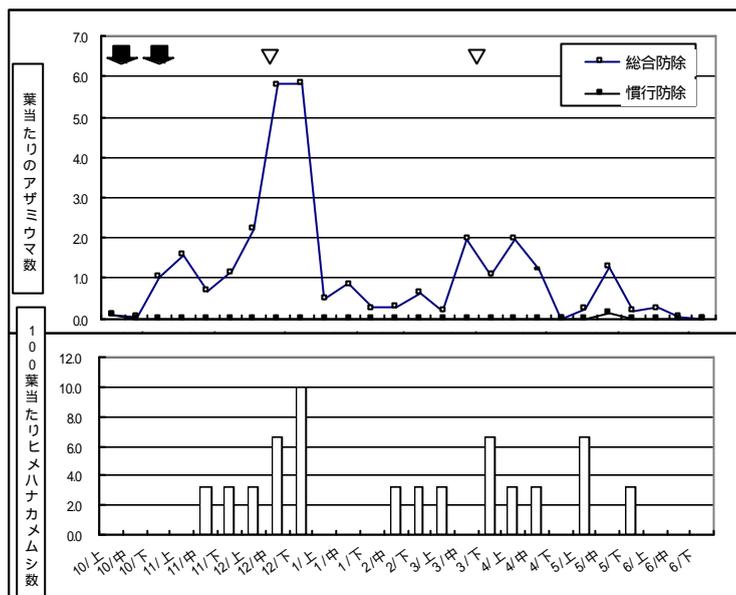


図1 アザミウマ(上)とヒメハナカメムシ(下、試験区)の発生活消長(平成17年、瀬高町)

総合防除：サイド、谷の開口部に0.4×0.2mmの防虫ネット設置

▼ タイリクヒメハナムシ放飼(1頭/m²) ▼ 選択的殺虫剤(プレオフロアブル)散布

慣行防除：サイドに2mm、谷部に4mmの防虫ネットを設置

殺虫剤を定期的に散布(表1を参照)

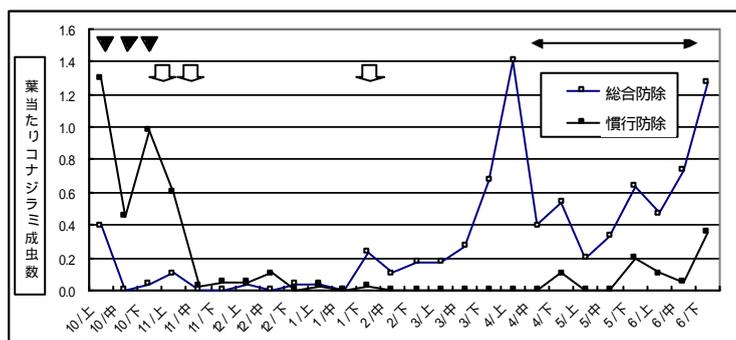


図2 コナジラミ類成虫の発生活消長(平成17年、瀬高町)

総合防除：□ オンシツツヤコバ放飼(12頭/m²) ▼ 選択的殺虫剤(粘着くん液剤)散布

←→ 気門封鎖型薬剤(オレート液剤等)を連続散布

慣行防除：殺虫剤を定期的に散布(表1参照)

[その他]

研究課題名：トマト・ナス減農薬防除体系の確立

予算区分：経常

研究期間：平成17年度(平成15～17年)

研究担当者：嶽本弘之、浦広幸、山村裕一郎